

イタリアにおけるアルバニア集落とアルバニア系イタリア人

——パレルモ県における事例——

一

イタリアにおいてエスニックまたは文化的マイノリティという場合、それらの歴史からも、またそれらが現代イタリア社会においてもっている社会問題の性格からも、三つのカテゴリーを区別することができる。まず歴史的にもっとも新しいものとして、一九六〇年代末、イタリア人人口の流出がもっとも顕著であったシチリアに流入しはじめたチュニジア人にはじまり、一九八〇年代になってから、全国的に急増したE.C域外からの外国人労働者で、この場合、最大の問題は外国人労働者受け入れのための制度面での整備のおくれであり、それとの関連で何十万という未登録（すなわち正規の滞在許可、労

竹 内 啓 一

働許可をもたず、社会保障、労働法などが適用されない）外国人の存在であるが、これらの問題については、すでにその一端を考察した（Takeuchi 1985）。第二のカテゴリーに属するものとして、近代国家イタリアの領域にとりこまれることになった言語的マイノリティであって、ヴァッレ・ダオスタのフランス語住民、アディジェ川上流域（南チロール）のドイツ語住民、サルデーニャ西部のカタラン語住民などがこれである。彼らはイタリア外の領域内ではマジョリティーであるが、イタリアにあっては、南チロールのドイツ語住民のごく一部をのぞいて、これらの言語的マイノリティの自治拡大あるいは分離独立のための運動は存在しない。ヴァッレ・ダオスタ州、トレンティーノ・アルト・アディージェ州で

は、イタリア語とならんで、フランス語、ドイツ語がそれぞれ公用語として認められているが、高等教育はイタリア語でしか受けられないなどの問題がある。

サルデーニャのカタラン語住民はアルゲーロを中心にした領域を以てはいるが、その起源が戦乱による移住の結果であり、またその分布が領域よりはむしろ集落単位であるという点で、ここで問題にする第三のカテゴリー、すなわち、周囲の、後にイタリア人と呼ばれることになる人々とは異質の文化(言語や宗教)をもった人たちが、イタリアという国ができる前から別の集落をかたちづくっていたことによるマイノリティであるとも考えることができる。そして本稿で考察の対象にするのは、この第三のカテゴリーに属し、イタリアで「アルバニア集落」(colonie albanesi)と通常呼ばれているものである。イタリアには、この「アルバニア集落」という概念とは別に、「アルバニア系イタリア人」(italo-albanesi)という概念があり、現在においては、すべてのアルバニア系イタリア人がアルバニア集落に住んでいるわけではなく、さらにこれらの用語の定義次第では、アルバニア集落は、その起源から、アルバニア人のみか

ら成り立っていたわけではなく、土着のロマンス語に属する言語の住民をふくんでいた。イタリアにおけるアルバニア集落に関しての日本語の文献は皆無であり、イタリアあるいはヨーロッパにおいても、現代においてアルバニア集落、アルバニア系イタリア人という用語が何を意味するのか、さらにはアルバニア集落の住民およびアルバニア系イタリア人のアイデンティティは何に求められるのかという問題についての考察はほとんどなされていない。

シチリアにおけるアルバニア集落をいくつか調査しただけであり、文献サーヴェイも不完全な予察的な報告であるが、そのような現在の研究状況からみて、このようなたちで報告をまとめておくのも意義がいくらかあると考えて本稿を発表する次第である。まず用語の吟味からはじめることとする。

二

現代世界においてアルバニア人というとき、通常はアルバニア語を母語(または母語の一つ)にする人たちと理解され、アルバニアに約三一五万人、旧ユーゴスラヴ

イタリアのコソヴォに約二〇〇万人、マケドニア、モンテネグロ等に約九〇万人の人たちがいる (Chiaromonte 1992 による)。イタリアにおいて現在、南部の約五〇の コムーネ (市町村) に約一〇万人のアルバニア人 (厳密には italo-albanisi¹⁾、アルバニア語で arbëreshë) がいるといわれているのであるが、イタリアのセンサスではイタリア国民のエスニシティの調査はしていないので、この数字はローマのイタリア・アルバニア協会 (Associazione Italia-Albania) などがあげてくるものにはすぎない (Chiaromonte 1992, Marco 1988)。この場合、彼らのすべてがアルバニア語を母語にする人たちであるわけではない⁽¹⁾、また彼らが話すアルバニア語は、イタリア内でも地域間で相違 (Altimari e Bolognari 1986) があり、さらにアルバニア、コソヴォで正書法が確立した言語として用いられているアルバニア語とはかなり異なる⁽²⁾。キアラモンテをはじめ、多くのイタリアにおけるアルバニア人問題の専門家 (albanologi) が指摘するように、市町村別にみると、arbereshe³⁾ がもっとも多いのはパレルモ市であって約一万五千人であるが、彼らの大部分は日常生活 (家庭生活) において、アルバニア語

を用いることはほとんどなく、アルバニア語を母語にする人たちの割合も小さい。彼らがアルバニア人 (italo-albanesi) とみなされ、彼ら自身が arbëreshë としてのアイデンティティをもつ最大の根拠は、多くの場合、ローマ、トリノ、ミラノ、コセンツアのアルバニア人の場合と同様に、ギリシャ・ビザンツ典礼のカトリック教徒であるということにある。具体的には、パレルモでなら S. Nicolò dei Greci alla Martorana 教会、ローマでなら Sant'Atanasio dei Greci al Babuino 教会、ミラノでなら S. Maurizio 教会、トリノでなら S. Michele Arcangelo 教会、コセンツアでなら Ss. Salvatore 教会でのミサに、年に何回かは列席するということである。

以上の事実だけからならば、イタリアにおけるアルバニア人は、歴史的には十四、十五世紀、とくにイスケンデル・ベイ (スカンデルベグ)⁽³⁾ の敗北 (一四六六年) 後、オスマントルコに「追われて」来住したアルバニア人に起源し、彼らは、彼らの典礼⁽⁴⁾と言語を保持してきたが、言語はイタリア統一後、いくつかのアルバニア集落で消滅したし、第二次世界大戦後は南部や北部の大都市へ移住する人たちがふえてこの傾向に拍車がかかった、しか

し彼らはギリシャ・ビザンツ典礼を容易に棄てないので、それが arbëreshë のアイデンティティーの源泉になっているのであるということが出来ようし、シチリア以外のカラブリアなど半島部のアルバニア集落だけの観察者は、しばしばこのような見解をとるのであるが(たとえは Lamatina 1987, Rother 1968, Regione Puglia 1988, 1989 の執筆者の大部分など)、『italo-albanesi』の定義 arbëreshë のアイデンティティーの問題はそれほど簡単なものではない。

まず問題になるのは、大都市に住んでいて、自他ともにアルバニア人と認めながら、他のイタリア人と同様にラテン典礼の教会に通い、さらにはアルバニア語も話すことのできない人がいることである。多くの場合、彼らはシチリアのアルバニア集落出身者であり、事実シチリアのアルバニア集落には、ギリシャ・ビザンツ典礼の教会とともにラテン典礼の教会が必ず存在する(S. Cristina Gela の場合には、例外的に、住民は日常生活でアルバニア語を使用しているが、ギリシャ・ビザンツ典礼の教会はなく、現在、村にはラテン典礼の教会が一つあるだけである)のであるが、アルバニア集落の住民でラ

テン典礼の教会に属する人たちがすべて arbëreshë としてのアイデンティティを持っているわけではない。アルバニア語およびギリシャ・ビザンツ典礼ということ以外に、年中行事、伝統的服装などフォークロアに関わる文化的要素が arbëreshë アイデンティティーの源泉をなしているわけである。

シチリアのアルバニア集落を戦士起源と農民起源のものに分けた場合⁽⁵⁾、Biancavilla, Michele, Palazzo Adriano, Mezzojuso, Contessa Entellina などの戦士集落にあっては、ラテン典礼の農民を周辺から集めて入植させる必要があったので、ラテン典礼の住民の比重がもとも大きかったし、バラッツォ・アドリアーノおよびコンテッサ・エンテリーナでは、支配階層であったアルバニア人戦士がこれら農民のためにラテン典礼の教会を建設した事実がある(Parrino 1995, Atanasio Schirò 1902, Alessandro Schirò 1923)。バラッツォ・アドリアーノでは、十八世紀半ばまでギリシャ・ビザンツ典礼の住民とラテン典礼の住民との間に明瞭なセグリゲーションがあったという歴史(Parrino 1995)がどこまで影響を与えているかは分からないが、第二次世界大戦の頃

までは、ラテン典礼の住民にはもともと *ardëreshë* としてのアイデンティティが希薄であったので、大都市に移住した第二世代にあってはこのアイデンティティが消滅していたことが当然予想される。コンテッサ・エンテリーナにあっては、戦士と農民とのセグリゲーションは歴史的にも存在しなかったし (Atanasio Schiro 1902)、農民集落である *Piana degli Albanesi* 出身者との姻戚関係も多い。それゆえであるとは断定できないが、ここではギリシャ・ビザンツ典礼であるカラテン典礼であることを問わず、住民の *ardëreshë* としてのアイデンティティが強い。十九世紀後半、アメリカに移住したこの村の出身者のうち数百人がニューオルリーonzに住んでいたが、彼らの相互扶助団体はコンテッサ・エンテリーナの名を冠して、少なくとも一九二〇年代までは活発な活動を展開していたし (Alessandro Schiro 1923) 現在でも、パレルモに住みラテン典礼の教会に属しながら、*ardëreshë* としてのアイデンティティを持ち続けている住民には、コンテッサ・エンテリーナ、サンタ・クリステイーナ・ジュエラ出身者が多い。

このようにして、現代イタリアにおいて *ardëreshë*

とは何であるかという問題は、彼らのアイデンティティの根拠が何であるかという問題とも関連して決して単純ではないし、ラテン典礼の場合にはアイデンティティを喪失することもあるからその数は流動的であるはずであり、イタリア全体で十万人ともいいう数がどこまで根拠のあるものであるかどうかは疑わしい。*ardëreshë* の定義の問題はこのようにして複雑であるが、「アルバニア人集落」という場合にはその定義は明瞭で、十五世紀から十八世紀の間にバルカン半島からアドリア海を渡ってきた集団あるいはその子孫の二次的な来住に現在の集落(ほとんどの場合、独立した行政体 *comune* をなしている) が起源し(「アルバニア人」集団が来住する以前に、小規模なロマンス語に属する言語の住民の集落が存在した場合もあるが、「アルバニア人」の来住によって新しい集落名が与えられた場合が多い)、国王、封建領主あるいは土地を所有する修道院などの教会当局によって、公式にアルバニア人集落の設立が、憲章 (*capitolo*) または永代小作権の承認 (*concessione enfiteutica*) のかたちで認知され (La Mantia 1904) すでに現在のローマの行政当局自身が *colonia albanese* であること

を認めている集落のことである。したがって、「アルバニア集落」とは、すぐれて歴史的事情による呼称であり、現在アルバニ人が多数居住するパレルモなどは当然アルバニア集落ではないし、アルバニア集落には、アルバニア語も消滅し、ギリシヤ・ラテン典礼その他アルバニア文化の痕跡が残っていない村もあることになる。

アルバニア集落には、名称としては「ギリシヤ人」(Greci)あるいはスラヴ人(schiavoni)の名を持つものがあるが、これはギリシヤ語系あるいはスラヴ系言語の住民という意味ではなく、ギリシヤ・ビザンツ典礼の住民という意味である。⁽⁸⁾アルバニア集落とは別に、プーリアおよびカラブリアには、四世紀から十世紀の間の南イタリアのビザンツ化に起源して(Gabrieli 1994)過去においては住民がギリシヤ語系方言を用いていたギリシヤ集落(Colonia greca)も存在したが、いずれの場合もギリシヤ語は消滅し、現在の住民はイタリア語およびその方言を母語にしている。イタリアにはアルバニア語住民に起源するアルバニア集落以外にも、すでに述べたように、カタラン語住民、セルボ語住民にそれぞれ起源する集落があるが、コムーネとしてその起源を何ら

かの意味で誇りにする、あるいはアイデンティティの源泉にするのは、アルバニア集落のみである。そしてアルバニア集落としての主張が、リソルジメントの運動のなかにあってはイタリア統一を歓迎し、ファシスト体制下にあつては帝国主義的膨張政策を支持するという「ナシヨナリズム」あるいは「イタリア主義」の高揚のなかでなされたこと(Marco 1988)には注目しておかなければならない。そのような過去に対して、一九七〇年代以降、アルバニア集落の問題がさかんに議論されるようになり、パレルモ大学のアルバニア文学・アルバニア語講座あるいはプーリア州などが主催して会議がいくつか開催されるようになったが(Centro Internazionale di Studi Albanesi presso l'Università di Palermo 1968, Guzzetta 1987, Regione Puglia 1988, 1989)これは、西ヨーロッパの統合の進展にともなう言語的およびエスニックな少数集団の主張の高揚という、西ヨーロッパ全体の動きに対応するものであり、過去におけるような「イタリア主義」への迎合と対極をなすものと考えなければならぬ。事実、一九八五年のパレルモ会議、一九八八年のピアナ・デイ・アルバネージ会議はテーマとし

て「言語的少数集団」をかかげた国際会議のかたちをとったのであった(AA. VV. 1987, 1989)。さらに近年は、イタリア国内においてEC域内からの外国人労働者が急増し、それが大きな社会問題になってきたのをうけて、ジャコモマッラのように、マグレブ諸国からの外国人労働者とアルバニア系イタリア人とを、国内におけるエスニックマイノリティという共通の視座、とくに都市のマージナル化した住民という観点から論じるようになってきている(Giacomarra 1994)。

近年、アルバニア集落の間の提携、連絡会議などの機会も、このような潮流のなかで増大してきている。一例として、一九九一年夏、アルバニアにおける社会主義体制の崩壊直後、多数のアルバニア人が船に鈴なりになって、続々とイタリアのアドリア海岸に漂着した。当初イタリア政府は、これらアルバニア人を政治難民として受け入れたが、その数がどれだけか予想もつかず、また東欧旧社会主義国から西ヨーロッパへの大量の難民流入をおそれていたEC諸国からの圧力もあって、一ヵ月もたたないうちにイタリア政府は、デ・ミケリス外相をティラナに派遣して、帰国者を処罰しないというアル

バニア政府の約束と莫大な経済援助を条件に、アルバニア人を難民と認めないことにし、以後すべての新たに到着したアルバニア人を送り返した。結局、その一ヵ月たらずの間に、約三万五千人のアルバニア人「難民」がイタリアに流入したのであるが、多くのアルバニア集落が、住民がアルバニア語をまったく理解しないものをもふくめて、何百年か前の村の起源がアルバニア人であるという理由から、これらアルバニア人「難民」を組織的かつ積極的に受け入れた。イタリア全体でどれだけかアルバニア人「難民」がアルバニア集落に受け入れられたかはわからないが、パレルモ県の場合、「難民」のアドリア海岸到来後、ただちに五つのアルバニア集落の執行部会議が持たれ、全体で約八五〇名の「難民」が空き家、ブレハブ住宅に受け入れられた。三万五千のうち八五〇というのは、決して多くないが、人口の合計が一万五千にみたくない五つのコミュニネが八五〇人の難民を受け入れるのはたいへんなことであった。パレルモ県のアルバニア集落に、これら「難民」を恒久的に受け入れるだけの経済的条件は勿論ないので、現在残っている「難民」はごく少数で、大部分はイタリア各地、外国(とくにアメリカ

カ合衆国)に移住していったが、一九九一年の「難民」事件は、イタリアのアルバニア集落の不思議な連帯意識を示すことになったのであった。なおこのようにして近年来住したアルバニア人は、*arbereshe*と区別して*shqipëritë*と呼ばれ、イタリア全体で総数約二万五千人(一九九四年一月)、七割が男性という点に特徴があり、宗教的には大部分がイスラーム教徒で、それに次いで多いのは正教徒、カトリック教徒の順である。

三

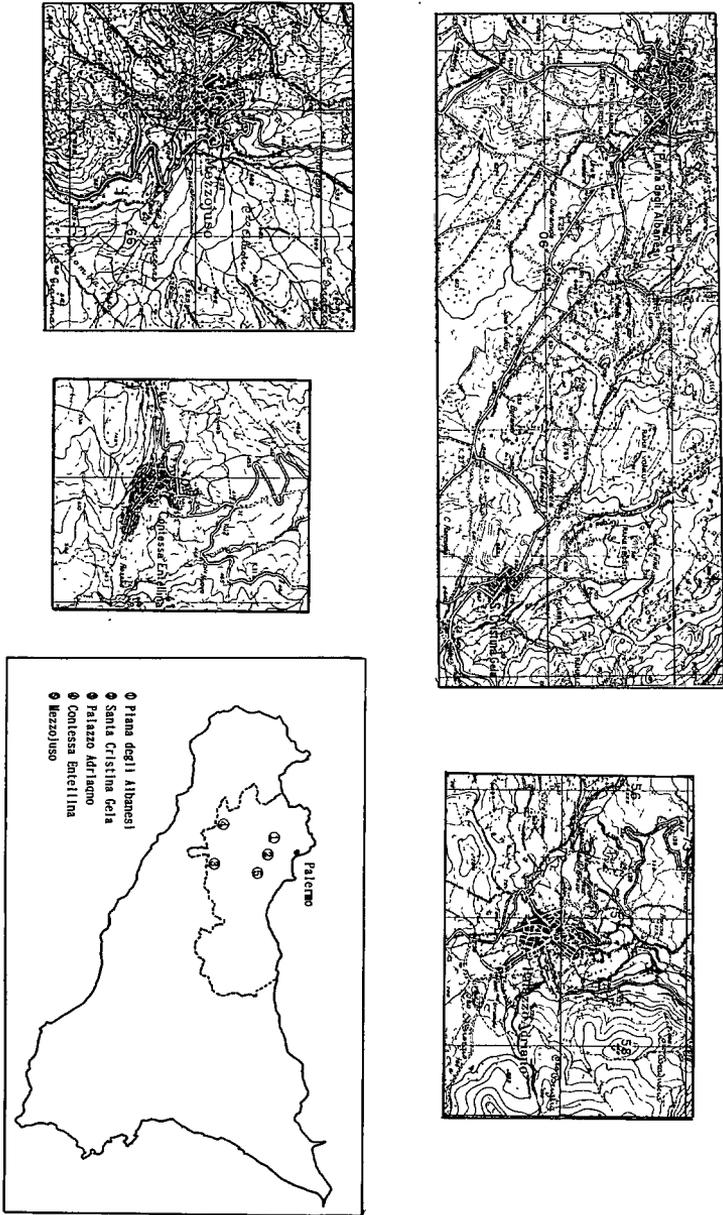
アルバニア集落のリストには、現在約五〇のムーネがあげられるのが常であるが、最も網羅的なものとしては、第一表にあげた Touring Club Italiano の一九六一年度の年鑑に掲載された、Fascinetto の Emanuele Giordano 神父によってまとめられたリストであり、資料的価値もあると考えられるので、これを転載しておく。このリストには、九五の、アルバニア人の創設に起源するか、多数のアルバニア人が流入して現在のムーネが形成された村(*paese*)、しかし大部分がムーネである)があげられ、アルバニア語の村は五五、総人口一三

万六千、イタリア語の村が四〇、総人口は一八万二千とされている。これら九五の村の総人口は、現在ではほぼ半減している⁽⁹⁾、アルバニア語が用いられている村(*paesi albanofoni*)の数も現在ではかなり減少していると考えられるが、私は正確な数を把握していないし、そもそもどのくらいの割合の住民が日常生活でアルバニア語を用いたら *paese albanofono* といえるのか、その基準もはっきりしない。そして、ここでジョルダノがあげている九五のムーネのなかには、住民およびムーネの行政当局の意識からみれば、現在ではアルバニア集落とは考えられないものが、かなりあると考えなければならぬ。

以下本稿で主として検討するのは、私が現地で調査したパレルモ県の五つのアルバニア集落である。短期間の現地訪問は、アグリジェント県の S. Angelo Muxaro、カタニア県の Bronte についてもおこなったが、前者が、十六世紀にパレルモ県のパラッツォ・アドリアーノからのアルバニア人植民に直接的には起源する (Bonasera 1965, 1988) という説は、史料的に確認されないし、十四世紀末以来の封土の歴史が現在ではかなり明ら

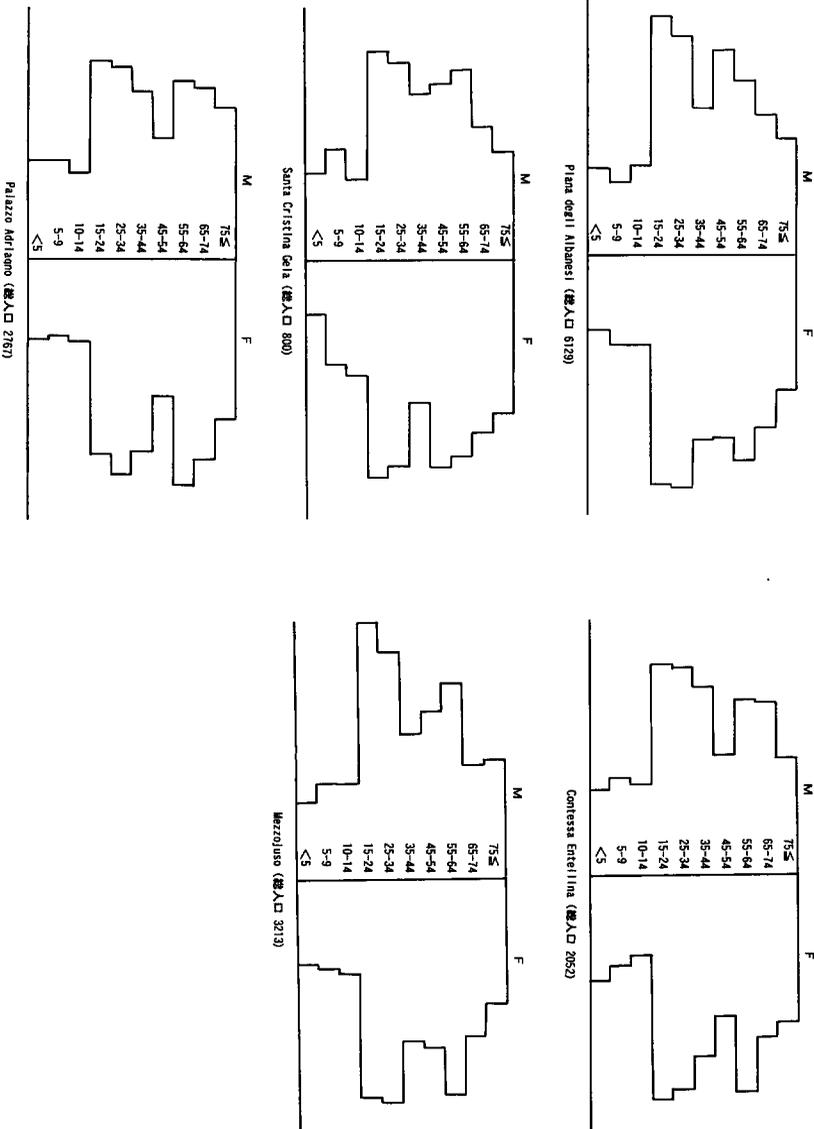
(9) イタリアにおけるアルバニア集落とアルバニア系イタリア人

第1図 パレルモ県の五つのアルバニア集落 (1980年代の Istituto Geografico Militare の25,000分の1地形図を縮小)



第2図 バルビモ県の五つのアルパニア集落の人口ピラミッド

(ISTATの1991年10月人口センサス公表データによる。ISTATの公表データでは、15歳から74歳までは10歳ごとのコホートに区分されており、15歳未満は5歳ごとのコホート、75歳以上は一括されているので、これらの図は厳密な意味での人口ピラミッドではない。)



(11) イタリアにおけるアルバニア集落とアルバニア系イタリア人

第1表 15世紀から18世紀の間に、アルバニア人による創設あるいはアルバニア人集団の来住に現在の集落が起源する村

言語については、I：イタリア語 A：アルバニア語

県名については、PA：パレルモ CT：カタニーヤ AG：アグリジェント
 CS：コセンツァ CZ：カタンザーロ RC：レッジョカラブリア
 PZ：ポテンツァ FG：フォッジャ TA：タラント
 CB：カンポバッソ LE：レッツェ AV：アヴェリーノ
 PE：ペスカーラ BN：ベネヴェント

イタリア語名	アルバニア語名	県名	司教区	言語
1. Contessa Entellina	Kundisa	PA	Piana degli Albanesi	A
2. Mezzojuso	Munxfisi	PA	Piana degli Albanesi	I
3. Palazzo Adriano	Pallàci	PA	Piana degli Albanesi	I
4. Piana degli Albanesi	Shëshi, Hòra, Qàna	PA	Piana degli Albanesi	A
5. S. Cristina Gela	Shën Kristina	PA	Piana degli Albanesi	A
6. Biancavilla		CT	Catania	I
7. Bronte		CT	Catania	I
8. S. Michele di Ganzeria		CT	Catania	I
9. S. Angelo Muxaro		AG	Agrigento	I
10. Acquafredda	Firmòza, Firmòçka	CS	Lungro	A
11. Castoregio	Kastèrnèxhi	CS	Lungro	A
12. Cavallerizzo	Kalvarici, Kejverici	CS	S. Marco Argentano	A
13. Cervicati	Cervikàti	CS	S. Marco Argentano	A
14. Cerzeto	Qàna	CS	Lungro	A
15. Civita	Çifti	CS	Lungro	A
16. Eianina	Ejanina, Purçilli	CS	Lungro	A
17. Falconara Alb.	Falkunàra	CS	Tropea	A
18. Farneta	Farnèta	CS	Lungro	A
19. Firmo	Fërma	CS	Lungro	A
20. Frascineto	Frasnita	CS	Lungro	A
21. Ioggi	Jòxhi	CS	S. Marco Argentano	A
22. Lungro	Ungra	CS	Lungro	A
23. Macchia Alb.	Màqi	CS	Lungro	A
24. Marri	Màrri, LLimàrri	CS	Lungro	A
25. Mongrassano	Mungrasàna	CS	S. Marco Argentano	I
26. Plataci	Pillàtni, Pillàtani	CS	Lungro	A
27. Rota Greca	RRota	CS	S. Marco Argentano	I
28. S. Basile	Shën Vasili	CS	Lungro	A
29. S. Benedetto Ullano	Shën Bendhiti	CS	Lungro	A
30. S. Caterina Alb.	Picèlla	CS	S. Marco Argentano	A
31. S. Cosmo Alb.	Shën Kozmài Sbrigàri	CS	Lungro	A
32. S. Demetrio Corone	Shën Mitri	CS	Lungro	A
33. S. Giacomo di Cerzeto	Shën Jàpku	CS	S. Marco Argentano	A
34. S. Giorgio Alb.	Mbuzàti	CS	Lungro	A
35. S. Lorenzo del Vallo	Sullarënxa	CS	Cassano Ionio	I
36. S. Martino di Finita	Shën Mértiri	CS	S. Marco Argentano	A
37. S. Sofia d'Epiro	Shën Sofia	CS	Lungro	A
38. Serra d'Aiello		CS	Tropea	I
39. Spezzano Alb.	Spixàna	CS	Rossano	A
40. Vaccarizzo Alb.	Vakarici	CS	Lungro	A
41. Amato	Amàti	CZ	Nicastro	A
42. Andali	Andali	CZ	S. Severina	A
43. Arietta di Petronà	Arjèta	CZ	S. Severina	I
44. Belvedere (frazione di)		CZ	S. Severina	I

イタリア語名	アルバニア語名	県名	司教区	言語
Belvedere di Spinello)				
45. Belvedere di Spinello		CZ	S. Severina	I
46. Caraffa	Garàfa	CZ	Catanzaro	A
47. Carfizzi	Karfici	CZ	Cariati	A
48. Casabona		CZ	Cariati	I
49. Curinga		CZ	Nicastro	I
50. Gizzerla	Jaxeria	CZ	Nicastro	I
51. Marcedùsa	Marçëdhùza	CZ	S. Severina	A
52. Pallagorio	Puhëriu	CZ	Cariati	A
53. S. Nicola dell'Alto	Shën Kolli (Kòghi)	CZ	Cariati	A
54. Spinello (frazione di Belvedere di Spinello)		CZ	S. Severina	I
55. Vena di Maida	Vina	CZ	Nicastro	A
56. Gagarisi		CZ	Catanzaro	I
57. Zangarona		CZ	Nicastro	I
58. Zinga		CZ	Cariati	I
59. Casalnuovo d'Africo		RC	Bova	I
60. Barile	Barill	PZ	Melfi	A
61. Brindisi di Montagna		PZ	Matera	I
62. Ginestra (Ripacandida)		PZ	Venosa	A
63. Maschito	Mashqiti	PZ	Venosa	A
64. S. Costantino Alb.	Shë Kostandini	PZ	Lungro	A
65. S. Paolo A1b.	Shën Pàli	PZ	Lungro	A
66. Casalnuovo Monterotaro		FG	Lucera	A
67. Casalvecchio di Puglia	Kazallvëqi	FG	Lucera	A
68. Castelluccio dei Sauri		FG	Bovino	I
69. Chièuti	Qëuti	FG	Larino	A
70. Faèto		FG	Troia	I
71. Monteleone di Puglia		FG	Troia	I
72. Panni		FG	Bovino	I
73. S. Paolo di Civitate		FG	S. Severo	I
74. Carosino		TA	Taranto	I
75. Faggiano		TA	Taranto	I
76. Fragagnano		TA	Taranto	I
77. Monteiasi		TA	Taranto	I
78. Montemesola		TA	Taranto	I
79. Monteparano		TA	Taranto	I
80. Roccaforzata		TA	Taranto	I
81. S. Crispieri		TA	Taranto	I
82. S. Giorgio Jonico		TA	Taranto	I
83. S. Marzano di San Giuseppe	Shën Marxàni	TA	Taranto	A
84. Galatina (ex Feudo di Skanderbeg)		LE	Otranto	I
85. Greci	Grëçi	AV	Benevento	A
86. Ginestra degli Schiavoni		BN	Ariano Irpino	I
87. Villa Badessa	Badhësa	PE	Lungro	A
88. Campomarino	Këmarini	CB	Larino	A
89. Montecilfone	Munxhufùni	CB	Termoli	A
90. Portocannone	Portkanùmi	CB	Larino	A
91. S. Croce di Magliano		CB	Larino	I
92. S. Martino in Pensilis		CB	Larino	I
93. S. Elena Sannita		CB	Campodasso	I
94. Urùri	Rùri	CB	Larino	A
95. S. Giacomo degli Schiavoni		CB	Termoli	I

(13) イタリアにおけるアルバニア集落とアルバニア系イタリア人

第2表 労働人口の構成 (1990年10月人口センサスのISTATのデータによる)

(上段は実数、下段は、就業人口、失業人口、若年失業人口については労働人口総数に対する百分率、産業別人口については就業人口に対する百分率)

	労働人口総数	就業人口	失業人口*1	最初の職を求めている人口(若年失業人口)	農業	工業	建設業	サービス業*2
Piana degli Albanesi	2,141	1,301 (60.8)	189 (8.8)	651 (30.4)	200 (15.4)	142 (10.9)	204 (15.7)	298 (22.9)
Santa Cristina Gela	258	171 (66.3)	45 (17.4)	42 (16.3)	33 (12.8)	29 (11.3)	22 (8.5)	48 (18.6)
Palazzo Adriano	947	554 (58.5)	183 (19.3)	210 (22.2)	195 (35.2)	104 (18.8)	54 (9.7)	108 (19.5)
Contessa Entellina	822	498 (60.6)	148 (18.0)	176 (21.4)	258 (51.8)	25 (5.0)	121 (24.3)	95 (19.1)
Mezzojuso	1,192	605 (50.8)	190 (15.9)	397 (33.3)	255 (42.2)	45 (7.4)	115 (19.0)	103 (17.0)
パレルモ県	448,635	280,321 (62.5)	54,590 (12.2)	113,724 (25.3)	30,683 (6.8)	37,974 (8.5)	36,246 (8.1)	84,416 (18.8)

*1 ここでいう「失業人口」とは、一度職に就いたのち失業した人たちのことで、「最初の職を求めている人口」をふくまない。「最初の職を求めている人口」の一部は、職がないので大学などに通学しているが、実質的にはこれも失業人口である。

*2 商業、運輸・通信業をふくむ。

かになっていて、現在の行政当局者も、自村をアルバニア集落とすることには否定的である。Bronte場合、カロス五世の命により、一五二〇年、いくつかの小村を統合してこの村 (universita) が設立されたとき、統合された集落に「アルバニア人」のものがふくまれていたことはたしかであるが、アルバニア集落としてのプロンテの憲章が存在しないなど、経済的にも、人口的にもこれだけ大きなコミュニネでアルバニア集落としての史料上の確証がえられないのは不自然であり、十八世紀初頭までアルバニアの文化要素は残存したかも知れないが、ペトロッタが指摘したように (Petrotta 1966)、プロンテをアルバニア集落とみなすのは、碩学スキロ (G. Schiro 1923) の学問的権威に盲従した誤りであるといえよう。ここでも現在のコミュニネ行政の担当者は、ことばを選びながらも、アルバニア人起源というのの一つの仮説にすぎないとのべていた。エトナの噴火と溶岩流による何回かの集落の破壊、ネルソン家領としての長い歴史を経て、プロンテの場合には、アルバニア集落としての歴史は、たとえ存在したとしても忘却の彼方に埋もれているといえる。

第3表 土地利用状態 (1982年10月農業センサスのISTATのデータによる)

	総面積 (ha)	播種地 (%)	放牧地 (%)	樹木栽培地 (%)	森林 (%)	その他 (%)
Piana degli Albanesi	4,528.15	64.1	23.8	9.3	0.7	2.1
Santa Cristina Gela	2,901.73	36.6	35.9	8.8	17.7	1.4
Palazzo Adriano	7,470.84	45.2	36.5	3.2	11.2	3.9
Contessa Entellina	8,521.98	62.2	15.7	12.4	6.2	3.5
Mezzojuso	4,623.38	63.0	19.2	14.3	1.0	2.5
パレルモ県	369,597.69	48.8	18.4	15.7	12.0	5.2

第一図には、パレルモ県の五つのアルバニア人集落、ピアナ・デイ・アルバネージ、サンタ・クリスティーナ・ジエラ、パラッツォ・アドリアーノ、コンテッサ・エンテリーナ、メッツォユーゾの位置を示したが、戦士集落であるパラッツォ・アドリアーノとコンテッサ・エンテリーナは、シチリアの東西を結ぶ歴史的には重要であった交通路上の丘上に位置し、さらに両地点はいずれも南海岸のシャッカから北上してくる幹線道路との交差点であり、傭兵の性格を持ったアルバニア人集団が、アラゴン王朝のもとで戦略的要衝の地に配置された事情をはっきりと示している。この

二つの村は、パラッツォ・アドリアーノのクリスピ家、パリーノ家、コンテッサ・エンテリーナのスキロ家、コッチャ家など、最近百年間、全国的に著名な政界、文化界の名士を輩出した。メッツォユーゾは、アグリジエントからパレルモに通じる幹線道路がアッツィリオロの広い河谷を通るのをぞむプリニャ山の山腹にあり、農業的にも豊かなこの河谷をコントロールするには最適の場所であった (Guttuso 1976)。村の憲章が与えられたのはパラッツォ・アドリアーノがもっとも古く一四六七年であるが、一五〇一年に憲章が与えられたメッツォユーゾがシチリアのアルバニア集落として中枢的地位を始めていたことは、サンタ・マリア・デレ・グラッツィエ教会付属の修道院およびそこに保存されている文書からも明らかである (Mandala 1995)。ピアナ・デイ・アルバネージは、広大なモンレアレ修道院領の一部をなし、ベスト流行後の無住の状態であったところに、十五世紀初頭よりアルバニア人難民が住みはじめ、一四八八年に憲章が与えられた農民集落である。サンタ・クリスティーナ・ジエラ⁽¹⁰⁾は、ピアナ・デイ・アルバネージの分村であり、その起源は十七世紀末から十八世紀中葉であ

ると考えられる⁽¹¹⁾。

アルバニア集落は、このようにしてまず歴史的に規定される。換言すれば、文書、伝承を通じて、住民が arbëreshë として社会化される場合は、過去に向けて時間的に拡張されている。言語、典礼は住民が過去と共存し、 arbëreshë アイデンティティを形成するひとつの契機ではあっても決定的なものではない。アルバニア集落では、このような、いわば過去とのネットワークの場合、そのような舞台をつくり、アイデンティティを再生産する舞台監督の役割をはたしているのが誰かということの問題にされなければならない。

事情は村ごとにかなり異なっていて、パラッツォ・アドリアーノとサンタ・クリスティーナ・ジュエラとでは、コムーネ当局とそれと結びついた Pro Loco などの名を冠した民間団体が主役なのであるが、一九五〇年代の農業改革時に土地を収容された大土地所有者がほとんどいなかった、すなわち今世紀初頭までに、十九世紀初頭以來形成された大土地所有者が没落してしまっていた貧しいこれらの村では、現在の指導階層は第二次世界大戦の頃までの状況とはまったく違って、来住アルバニア人か

土着農民かという出自も、ギリシャ・ビザンツ典礼カレン典礼かということも問われることなく、農民運動、

政治運動(県、州、中央政府との人的チャンネルをつくることを意味する)において実力を発揮した階層である。

ピアナ・デイ・アルバネージ、コンテッサ・エンテリーナ、メッツォエューゾでは、農業改革時に在村(主としてピアナの場合)および不在の大土地所有者の所有で、粗放な土地利用状態だった土地が広範に存在していて、これが直接耕作者に再配分された。ピアナは、起源が農民集落であり、戦士の家柄に由来する名門家族は存在しなかったが、ピアナの農家族間での階層分化がすすみ、またかなりの土地が村外の土地所有者の手にわたり、第二次世界大戦前には農民運動もはげしかったし、一九五〇年代の農業改革によって、村内の土地所有関係は大きく変化した(Mandata 1987)。現在村政をになっているのは、上層自作農、および上層自作農出身で高等教育を受けて村内で商業、自由業などを展開している人たちであるが、いずれもアルバニア語住民である。これらの村内指導層が、全イタリアのアルバニア集落のなかでもっとも活発なアルバニア文化運動、アルバニア文化復興

運動を展開しているものであり、アルバニア語学習運動などに対する住民の支持は強いようである。大土地所有制が広範に見られたこと、農業改革により、村内の社会関係が大きく変わった点では、コンテッサはピアナと共通しているが、現在村政をになうエリートに、村外に流出したり没落した家族ほどの大名門ではないが、戦士出身の家柄の人間が名前をつらねているのが、ピアナとはちがっている。コンテッサでも、これら指導層のイニシアティブのもと、義務教育課程での課外のアルバニア語授業の導入など、アルバニア文化運動の近年のもり上がりが目される。道路標識をイタリア語、アルバニア語の二言語にする点などでは、アルバニア集落のなかでもコンテッサがもっとも徹底している。メッツォエューゾでもピアナ、コンテッサ同様、大土地所有制が一九五〇年代の農業改革まで残存したが、ここでは戦士出身家族の多くがその頃までに不在化していたため現在の村の指導層は、ギリシャ・ビザンツおよびラテン典礼双方の住民からなり、行政当局はアルバニア集落であることを、何よりもその歴史から強調しようとしているが、アルバニア語がすでに前世紀に消滅していることもあり、典礼、民

俗行事以外に、arbesheアイデンティティーの社会化の方策をもたないという弱点をかかえている(Gatinoso, 1976)。なお、イタリアの農業改革は、その名称が意味するように、単に農地の再配分だけを目的にしたのではなく、灌漑設備、樹木栽培のためのテラスの造営による土地改良、それによる農業生産力の上昇をもめざしていた。当初、その効果はあまりあがらなかったが、四〇年以上にわたるシチリア農業改革公団の事業により、農業改革が実施されたコムーネにおいては樹木栽培地の比重が高くなっている(第三表参照)。

アルバニア集落の場合と対照的に、パレルモに居住するアルバニア集落出身者および彼らの二世、三世の場合には、arbesheアイデンティティーの維持、社会化の場は家庭、教会(ただしギリシャ・ビザンツ典礼の場合のみ)という空間にとどめられた、時間的には共時的存在の場に限定される。その場が時空間的に拡張する可能性は、交通、通信手段の発達にもなうコムニケーション、すなわち空間的ネットワークの形成であり、事実これがかなり大きな役割を果たしているようであるが、それを確認する数量的データを今のところ私はもちあわせ

ない。大都市空間で孤立して生活する彼らの場合、*Bir*、*Derehë* アイデンティティを再生産する場を時間的に拡張することができるのは、パレルモ大学のアルバニア文学・アルバニア語科などで正書法を習得したきわめて限られた場合のみである。

四

以上にみたように、五つのコムーネでも、それぞれの歴史、集落内の社会統合とシステム統合の様式は異なっているのであるが、経済生活の内容には、相違があるのが当然であっても、それが社会統合とシステム統合の相違を規定しているとは考えられない。以下最後に、このことを概観しておくことにする。

戦士集落であれ、農民集落であれ、パレルモ県の五つのアルバニア集落は、パレルモ周辺の「黄金の三角帯 (Conca d'Oro)」をはじめとする豊かな農業地帯外の、いわばマージナルな内陸部に位置していたから、商品経済、貨幣経済の浸透にともなつて、イタリア南部内においても、その経済的狀態は相対的に劣悪化した。第二表から、五つのアルバニア集落がいずれも、農業従事者の

比重がパレルモ県全体の平均より高いことがわかるし、第三表からは、イタリア南部ではもっとも集約的な土地利用形態である樹木栽培地の比率が低く、一般に粗放な土地利用形態である播種地⁽¹⁹⁾の比率が高いことが知られ、パレルモ県のアルバニア集落が経済的にマージナルな状態にあることを示している。

これらすべてのコムーネに共通して、人口数の最大を記録したのが一八六一年であり、五つのコムーネの人口の総計は二万六千であった。十九世紀を通じて南北アメリカに大量の移民を流出させ、一九二一年には、すべてのコムーネにおいて、人口は一八六一年の六割ないし七割にまで減少した。人口の自然増加率が十九世紀後半、二十世紀初頭を通じて年間一〇%を上回っていたことと、考えあわせれば、移民の数がいかに多かったか、そして彼らの大部分が、彼らの子供、孫の代にまで *aderëshe* としてのアイデンティティを伝えるのが非常に困難な環境に生きたことは想像にかたくない。その後ファシスト政権時代、第二次世界大戦中には移民は激減し、どのコムーネでも人口増を記録し、一九五一年センサスでの五コムーネの人口は二万一千である。一九五〇年代末か

ら一九七三年まで、西ヨーロッパ諸国および北イタリアへ大量の人口流出があったが、当時の一〇代、二〇代人口が流出したあとは第二図の一九九一年センサスによる人口の年齢構成からもみることができている。

交通上の位置条件からみると、ピアナ・デイ・アルバネージは、パレルモまで三〇キロであり、曲がりくねった山道ではあるがパレルモに通勤可能であり、メッツォ・ユーゾの中心集落¹⁴は、パレルモまで約五〇キロあるが、高速自動車道(無料)とそれに準ずる道路(superstrada)で結ばれているのでパレルモへの通勤、通学はピアナ・デイ・アルバネージよりも容易である。また、ピアナ・デイ・アルバネージとサンタ・クリステイナ・ジェラとは近くに水力発電施設をもち、これらが約四〇人を雇用していて、これは役場に次いで多い雇用数である。これらの事情のために、ピアナ、サンタ・クリステイナ、およびメッツォ・ユーゾにおいては、若年層が比較的多く村に残り、パラッツォ・アドリアーノとコンテッサ・エンテリーナでは人口の老齢化が顕著であることがわかる。就業構造からみるとパラッツォにおいて工業従事者の比率がやや高いが、これは通勤可能な範囲

に食料加工、建築材生産の農村工業が立地しているからであって、村の産業を特徴づけるものではない。コンテッサにおいて建設業従事者に比率が高いのは、一九六八年の地震により村の建物の半分以上が大きな被害を受けて、中央政府、州政府、ボランティア団体の援助を受けて、新しい市街地が建設され、現在も古い建物の更新がさかんであるからである。救援、援助というかたちでの所得移転が、地元にも中小建設業の発達をもたらしたわけであるが、震災の復興が一段落をとげた現在、これら業者がこれから村外の仕事を受注する能力があるかどうか、が村の経済にとって重要であるが、一九九五年および一九九六年の調査時点ではかなり好調な様子であった。

シチリアのいくつかのコミュニネがアグロ・ツーリズムをかねたセカンド・ハウス団地を建設したりしているなかにあって、ここでとりあげた五つのアルバニア集落にはそのような派手な動きはないし、他方、失業率などイタリア南部に共通する困難な問題を多くかかえてはいるが、地理的、経済的にマージナルな位置にあっても、EU体制下で生き残りうるような大規模安定経営農家の形成など、新しい動きがいくつか観察され、コミュニネの存

統が経済的に脅かされているという、イタリア南部では決して稀ではない傾向も今のところみられない。アルバニア集落における *arbereshe* アイデンティティーの社会化の成否は、村内の権力関係、それとの関連で住民のそのための主体的実践がどこまでなされるかにかかっているといえよう。

(1) アルバニア語を母語にする場合でも、イタリア語、それぞれの地方の南部諸方言をも母語にする三母語状況にある。

(2) ローマ、パドヴァなどの限られた大学のアルバニア文学・アルバニア語コースで現代アルバニア語を学ぶか(何人かはさらにコンヴェへの留学経験をもつ)、グロッツァフェラータのそれなど、数少ないイタリア・バジリオ修道会の神学校卒業者を例外にして、イタリアのアルバニア語住民のほとんどは、アルバニア語に関しては「文盲」である。アルバニア集落のいくつかでは、村役場のインシニアティヴで市民向けのアルバニア語コースが開設されはじめているが、アルバニア共和国の公用語を教えるべきか、それぞれのアルバニア集落のアルバニア語を教えるべきかについて、見解が対立している状態である。

(3) イタリアのアルバニア集落には、この伝説的英雄 (Fraseri 1962) Skanderbeg または Scanderbeg の名を

冠した通り、広場、店などがかならずある。

(4) 十四、十五世紀に来住した正教徒のアルバニア人が、正教の世界から切り離されて、イタリア南部のカトリックの司教区に属するようになったのか、それとも当時バルカン半島にかなりのカトリック教徒がいたことはたしかであるから、イタリアに來住した「アルバニア人」の大部分は既にカトリック教徒であったはずであるのかという未解決の議論がある (Russo 1976)。イスケンデル・ベイが教皇ハンガリー、ナポリ政府の支持を得てトルコ軍と戦ったことから、たしかな資料によって裏付けられてはいないが、多くの論者が後者の説を支持している (Parrino 1973, 1995, Kellner 1972, Gegaj 1987)。アルバニア集落の教会はギリシャ・ビザンツ典礼、ラテン典礼を問わず、必ずしも周辺の村とおなじ司教区に属するわけではなく、バレルモ県のアルバニア集落はすべて *Plana degli Albanesi* の司教区に属するし、カラブリアのコセンツァ県のアルバニア集落の大部分は、それ自身がアルバニア集落である *Lungro* の司教区のもとにある(第一表参照)。

(5) この区分は、*Mandala* による。Kellner 1972 は、軍事植民 (*Militärkolonien*) と難民植民 (*Flüchtlingskolonien*) に二分している。

(6) アルバニア集落においては、ラテン典礼の住民とビザンツ典礼の住民との婚姻はかなり多い。むしろ、典礼の相違は結婚の障害にならない。そして、結婚式は新郎の属する教会で挙げられるのが原則であり、子供の洗礼も父親の

教会でなされるが、この場合アルバニア集落に居住する限り、ラテン典礼の教会に属することが *Ardeente* としてのアイデンティティ喪失の理由になるとは考えにくい。

(7) 奴隷を意味する *schlavone* は、中世および近代においては、アドリア海沿岸部、現在のクロアチアおよびスロベニアのスラヴ系言語の住民を意味して用いられていた。

(8) 例えば *Piana degli Albanesi* は、一九四一年までは *Piana dei Greci* といふ名前であった。この名称の変更の背景には、アルバニア現代文化の復興にイタリアの「アルバニア人」が大いに貢献したというファシスト体制のもとでなされた主張があった。

(9) ジョルダノによる総人口の計算は、第二次世界大戦後では、南イタリアの農村人口が最も多かった一九五一年のセンサスによっている。コムーネ内部の地区 (*frazione*) へのデータを手元に持ち合わせていないので、正確な計算をすることはできないが、一九九一年のセンサスからおおよその集計をみると、この表でアルバニア語とされている村の総人口は七万一千、イタリア語とされている村の人口は一〇万九千になる。

(10) シチリアにおける封建制の廃止(一一八二年)をうけて、両シチリア王国において、一八一八年にコムーネとして認められたときにはサンタ・クリスティアーナの名前であり、一八七一年、イタリア王国のもとでサンタ・クリスティアーナ・ジェラの名前になった。

(11) *La Mantia* 1904年、一六九一年五月三十一日、パレル

モの大司教が、八一名のピアナ・デイ・アルバネーシの農民に永代小作権を与えたのをもってサンタ・クリスティアーナの創設とみなしているが、ラ・マンティアの引用する永代小作権承認の文書をよく読むと、サンタ・クリスティアーナはアルバニア農民の入植する場所の地名として書かれているだけであり、決して入植者集団に集落としての特権を与えたものではなかった。キアラモンテはこの点に注目し、さらにシチリアの大封建領主ジェラ家への言及が一九九一年の認可状ではまったく疑問をもち(Orsi, *armonie* 1967)、近年になって、ジェラ侯爵家が、サンタ・クリスティアーナのみでなく隣のピアナネットをふくめた領主であることを認めた一七四七年の文書を発見して、集落としてのサンタ・クリスティアーナの起源が十七世紀中葉であることを主張した(この文書はパレルモの公証人文書館文書番号 V. 8318であることを、同氏は一九九三年にサンタ・クリスティアーナ・ジェラがまとめたパレルモ県の内部文書で明らかにしているが、私はこの公証人文書史料にまだあたっていないし、キアラモンテ自身、ラ・マンティアの所説を修正する学術的な論文をまだ発表していない)。

(12) イタリアの経済史家がしばしば農民的ラティフンディウム (*latifondo contadino*) と呼ぶもので、没落したりあるいは地代収入に見切りをつけた不在地主が、土地を「売り逃げ」し、そのあとに二年に一度冬小麦を栽培するだけの粗放な土地利用のまま、小農民的土地所有が見られ

た場合のことである。この場合、Iatifondoとは字義通りの大土地所有を意味するのではなく、大土地所有制に由来する粗放な土地利用を意味して用いられており、スズメーンにおけるミニフンチュウム (minifundio) がほぼこれに相当する。

(13) 播種地の多くは、「裸の播種地 (seminativo nudo)」で、灌漑施設もなく二年に一度冬小麦を栽培するだけの古代ローマの頃とはとんと変わらぬ農業が行なわれてゐる。播種地には灌漑による園芸農業ならぬは施設園芸農業がみられるが、ローマーネ単位で公表されてゐる農業生産のデータでは、播種地 (seminativo) と一括されてゐる。灌漑耕地はハレルモ県にもかなりあるが、その多くが樹木栽培地になってゐる。施設園芸はブグリシメント圏に多く、ハレルモ県にはほとんどない。

(14) メッソジョーンズでは、中心集落以外に、丘陵部に散居状の農家が近年特に増えてゐる。ローマーネ全体の就業構造からみれば農業の比率が高い。中心集落からハレルモに通動する人たちは、主として建設業、サービス関連産業に従事してゐる。

文献

- AA. VV.: "Le minoranze etniche e linguistiche. Atti del I Congresso internazionale (1985)". Palermo 1987
AA. VV.: "Le minoranze etniche e linguistiche. Atti del II Congresso internazionale: Piana degli Albanesi, 7-11 settembre 1988". 2 voll. Palermo 1989

Ajvalasi, V.: S. Cristina Gela: Una ricerca antropologica. "Le minoranze etniche e linguistiche: Atti del II Congresso internazionale: Piana degli Albanesi 7-11 settembre 1988". Palermo 1989

Altinari, F., Bolognari, M. e Carrozza, P.: "L'esilio della parola: la minoranza linguistica albanese in Italia". Pisa 1986

Bonaserà, F.: Le colonie albanesi in Sicilia. "Atti del XIX Congresso Geografico Italiano". Como 1965, pp. 197-218

Bonaserà, F.: "Un particolare aspetto dell'insediamento umano in Sicilia: le comunità albanesi". Palermo 1988
Buccola, O.: "La colonia greco-albanese di Mezzogiorno. Origine, vicende e progresso". Palermo 1909

Centro Internazionale di Studi Albanesi presso l'Università di Palermo: "V. Convegno internazionale di studi albanesi, V mblethje ndërkombëtare studimesh shqiptare, XI 1968". Palermo 1969

Chiaromonte, Z.: Notizie sulle origini e sulla storia della colonia albanese di S. Cristina Gela (Palermo). "Annuario del Centro Internazionale di Studi Albanesi 1966-67". pp. 5-14

Chiaromonte, Z.: La situazione bibliotecaria presso gli Albanesi di Sicilia. D. Morrelli (a cura di): "Atti del Convegno 'Comunità religiose e minoranze linguisti-

- che oggi in Italia: Palermo-Piana degli Albanesi, in occasione del 50 anniversario della costituzione della sede vescovile di Piana degli Albanesi". Piana degli Albanesi 1988, pp. 11-116
- Chiaramonte, Z.: "Noi veniamo dall'Albania. Storia di vita, leggende, ricette, indirizzi utili". Roma 1992
- Cirincione, A.: "Cenni storici sull'origine delle colonie albanesi di Sicilia". Palermo 1986
- Comune di Contessa Entellina: "Contessa Entellina. La sua storia vista attraverso le opere di Can. Anastasio Schirò, Sac. Spiridione Lo Jacono, Prof. Alessandro Schirò, Prof. Giuseppe Schirò". Palermo 1995
- Comune di Mezzoluso: "Il codice chieutino di Niccolò Figlia" (Edizione critica e concordanza a cura di M. Mandalà). Mezzoluso 1995
- Costantino, M.: La questione arbrëschë: tentativo di definizione: per lo sveciamento della cultura e un approccio meridionalistico alla problematica della minoranza italo-albanese di Calabria. Cosenza 1988
- Demetrio, K.: "Alberia: Storia, cultura, folklore". Castrovillari 1988
- Frashëri, K.: Georges Kastriotë Scanderbeg. Heros national des albanais (1405—1468). Tirana 1962
- Gabrielii, G.: Gli italo-greci e le loro colonie. Notezze storico-linguistiche e bibliografiche sulle colonie italo-bizantine tuttora esistenti nel Mezzogiorno d'Italia. "Studi Bizantini". Seconda serie, Politica, Storia-Economia V, 1924
- Gambarara, D.: Etnicità, comunicazione, organizzazione. "Zjarr". XII, n. 27, pp. 49-67
- Gattuso, I.: "Economia e società in un comune rurale della Sicilia". Turminelli, Palermo 1976
- Gegaj, A.: "L'Albanie et l'invasion turque au XVe siècle" (Recueil de travaux publiés par les membres des conférences d'histoire et philologie, Université de Louvain). 2me serie, fasc. 40 1937
- Giacomarra, M.: "Immigrati e minoranze. Percorsi di integrazione sociale in Sicilia". Palermo 1994
- Giordano, E.: "Folklore albanese in Italia. Usi e festeggiamto tradizionale nell'occasione della Pasqua in Frascineto ed Ejanima(Cosenza), Cassano Ionico 1957
- Guzetta(a sure di): "Etnia albanese e minoranze linguistiche in Italia. Atti del IX Congresso(1981)". Palermo 1987
- Guzzetta, A. (a cura di): "Etnia albanese e minoranze linguistiche in Itaria. Atti del IX Congresso(1981)". Palermo 1985
- Kelner, H.: "Die albanische Minderheit in Sizilien". Wiesbaden 1972
- Korolevskij, C.: "Le vicende ecclesiastiche dei paesi italo-

- albanesi della Basilicata e della Calabria". Archivio Storico per la Calabria e la Lucania 1931
- La Mantia, G.: "I capitoli delle colonie greco-albanesi di Sicilia dei secoli XV e XVI". Palermo 1907
- Lamattina, G.: "Ginestra: Storia di un popolo". Salerno 1987
- Laviola, G.: "Società, comitati e congressi italo-albanesi dal 1895 al 1904". Cosenza 1974
- Lo Jacono, S.: "Memoria sull'origine e fondazione della Comune di Contessa, Colonia greco-albanese di Sicilia". Palermo 1880
- Mandalà, M.: "Per un'indagine storiografica su Pianadegli Albanesi. AA. VV.: "Le minoranze etniche e linguistiche. Atti del I Congresso internazionale (1985)." Palermo 1987. pp. 233-244
- Mandalà, M.: "Introduzione "Il codice chieutino di Niccolò Figlia". Palermo 1995. pp. XVII-XCVIII
- Marco, C.: "La questione arbrëshë. Tentativo di definizione. Per lo sveciamento della cultura e un approccio meridionalistico alla problematica della minoranza italo-albanese di Calabria". Cosenza 1988
- Parrino, I. (a cura di): "Documenti sulle origini della cultura riflessa siculo-albanese". Palermo 1973
- Parrino, I.: "Da Crispi a Sturzo nella storia di Palazzo Adriano" Vol. I Parte I, Le origini, Parte II, L'ambiente.
- Palermo 1995
- Petrotta, S.: "Albanesi di Sicilia. Storia e cultura". Palermo 1966
- Pitto, P.: "L'identificazione culturale della tradizione della diaspora fra gli arberëshë in emigrazione. "Le minoranze etniche e linguistiche: Atti del 2 Congresso internazionale: Piana degli Albanesi, 7-11 settembre 1988". Palermo 1989, II pp. 667-688
- Regione Puglia, Assessorato P. I., Centro Servizi Culturali Distretto 54 Grottaglie: "II Convegno di lingua e cultura albanese". 26-27 giugno, 1986. Grottaglie 1988
- Regione Puglia, C. R. S. E. C.: "Le minoranze etniche e linguistiche: una questione storica, una sfida per la democrazia". Atti del III Convegno nazionale dei comuni albanofoni-24/26 giugno 1988-S. Marzano di S. G. Regione Puglia-Assessorato P. I. e Cultura-C. R. S. E. C. Grottaglie 1989
- Rother, K.: "Die Albaner in Südtalien. "Mittelungen der Österreichischen Geographischen Gesellschaft". 110-1 1968. S. 1-20
- Russo, L.: "Albanesi d'Italia". Palermo 1975
- Schirò Alessandro: "Guida illustrata delle colonie albanesi di Sicilia-Contessa Entellina". Palermo 1923
- Schirò Atanasio: "Memorie storiche intorno alle origini e vicende di Contessa Entellina". Palermo 1902

- Schirò, G.: "Canti tradizionali e altri saggi delle colonie albanesi di Sicilia." Napoli 1923
- Sciambra, M.: Prime vecene delle comunità greco-albanesi di Palermo e i suoi rapporti con l'oriente bizantino. "Bollettino della Badia Greca di Grottaferata". No. 16 1962. pp. 95-159
- Takeuchi, K.: Some Problems Regarding Ethnic Minorities in Italy: A Preliminary Survey of Foreign Labourers in Southern Italy. "Mediterranean World". No. 14 1995. pp. 121-136
- Valenziano, C.: Rito bizantino ed etnia dei siculo-albanesi. A. Guzeta (a cura di): "Etnia albanese e minoranze linguistiche in Italia. Atti del IX Congresso (1981). Palermo 1985. pp. 423-426
- Zangari, D.: "Le colonie italo-albanesi di Calabria. Storie e demografia, secoli XV-XIX." Napoli 1941

〔後記〕 本稿は平成六年度―平成七年度文部省科学研究費補助金(国際学術研究)『地中海世界沿岸都市におけるマイノリティー集団のネットワーク』(課題番号〇六〇四一〇四〇) 研究代表者 竹内啓一) による現地調査にもとづく研究成果の一部である。また、資料の整理には平成八年度駒澤大学特別研究助成の一部を利用した。イタリアにおける調査に際してはたくさんの方のお世話になったが、情報、資料の提供などの面で、特にお世話になった方の名前を以下列挙し、謝意を表したい。 Ignazio Parrino (パレルモ大学教授、バラッツォ・アドリアーノ在住) / Matteo Mandala (パレルモ大学研究員、ピアナ・ディ・アルムネーシ在住) / Zef Chiaramonte (サンタ・クリスティーナ・シッコラ村立図書館長) / Giuseppina Cuccia (モンテッサ・エンテリーナ文化担当助役) / Lino Pennacchio (メッソチオーソ村役場文化担当) / Pippo Bonanno (画家、パレルモ在住)

(一橋大学名誉教授・駒澤大学教授)